

検証

吉田調書

③

福島第1原発事故では2011年3月12日、1号機格納容器から蒸気を放出して圧力を下げ、ペントを試みられたが、電源を失った現場の作業は困難を極めた。吉田昌郎元所長は政府の事故調査・検証委員会の聴取に、ペントの弁を手動で開けようと高線量の建屋に向かった当直員の苦労を強調し、東京電力本店や政府の無理解を批判している。

「電源がなく中央制御室から操作ができない。」

「AO弁(空気作動弁)のエアがない、もちろんMO弁(電動駆動弁)は駄目だと。手動でどうなんだと言つと、線量が高だから入れないというふうな状況がここから入ってきて、そんなに大変なのかという認識がや

ペント難航、首相に説明

「電源が死んでる」



福島第1原発のグラウンドに到着し、バスで免震重要棟へ向かう菅直人首相。右は東京電力の武藤栄副社長＝2011年3月12日(肩書は当時、内閣広報室提供)

っと出来る。その辺がまた本店なり、東京に連絡しても、伝わらないですから」

12日未明、1、2号機中央制御室では、弁の手動操作に向け

高線量の建屋へ突入する作業員の人選やルートを検討、機材の準備が進んでいた。一方、現場の状況を知らない首相官邸側は、12日午前6時50分、

海江田万里経済産業相がペント実施命令を出した。「一番遠いのは官邸ですね。要するに大臣命令が出ればすぐ

に開くと思っているわけですから、そんなもんじゃないと。現場では何をやってもできない状態なのに、ぐずぐずしているというので、東電に対する怒りが、このペントの実施命令にな

ったのかどうかは知りませんが、それでも、それは本店と官邸の話ですから、私は知りません」

ペントが一向に実施されず、東電への不信感を募らせた菅直人首相は12日朝、現地視察に踏み切る。ヘリコプターで第1原発に降り立つと、免震重要棟2階の会議室で吉田氏と向き合った。

ペントを急げと激高する菅氏に、吉田氏は図面を示しながら現場の状況を説明し「決死隊をつくってでもペントをする」と決意を伝えた。

菅氏は何のために来ると。「知りません。行くよという話しかこちらではもらっていません。私が(会議室に)入って行って、座った時点で、かなり厳しい口調で『どういふ状況にな

っているんだ』という言葉を聞かれたので、電源がほとんど死んでいきますということで、制御が利かない状態ですと。『ペントどうなった』というから、大臣から命令が出た直後だったので、出ましたと、われわれは一生懸命やっていますけれど、現場は大変ですという話はしました」

菅氏は吉田氏と初対面だった。共同通信の取材に「ある種の迫力があって説得力があったから、この男ならやってくれるだろうという印象だった」と振り返っている。

調書の中で吉田氏は、視察に配慮してペントを遅らせた可能性をきっぱり否定した。

「早くできるものは(ヘリに)かけてしまったっていいじゃないかぐらいですから。総理大臣が飛んできようが、何しようが、炉の安全を考えれば早くしたいというのが、現場としてはそうです」(肩書は当時)